

國學院大學学術情報リポジトリ

2022 年度 宗教文化士の集い（共催）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001539

2022年度 宗教文化士の集い

2023年2月25日、宗教文化教育推進センター主催、國學院大學神道文化学部および日本文化研究所の共催による「宗教文化士の集い」が、國學院大學渋谷キャンパスとオンラインの併用形式で開催された。以下にその内容を報告する。

第一部では、櫻井義秀氏（北海道大学大学院教授）が「宗教リテラシーの低下がカルト問題を拡大する——統一教会問題から考えるべきこと」と題して講演を行った。櫻井氏は宗教社会学者として、カルト問題や宗教の社会貢献について研究してきた実績がある。講演には國學院大學学生を含め100名以上が参加した。

櫻井氏によると、統一教会（世界平和統一家庭連合）はキリスト教が韓国で土着化して生まれた教団であり、時代ごとにその形態を大きく変えてきている。合同結婚式は1960年代から始まったが、これは創始者の文鮮明と韓鶴子が信者たちの仲人を務めることで、「無原罪の子供たち」を増やすことを目的としている。また、信者には地獄で苦しむ先祖を救うために献金を積むこと（先祖解怨）が要求されるが、韓国と比べ日本の信者の献金額は遥かに高く設定されている。これは日本が韓国を植民地化していた時代に生まれた世代の日本に対する認識が背景となっているとされ、こうした点から櫻井氏は統一教会を「怨みの宗教」と呼んでいる。

統一教会は、伝道の過程で「靈感商法」などによる社会問題を引き起こす一方、共産主義や同性愛への反対姿勢から保守派の政治家と強く結びついてきた側面がある。現在では

法的な側面から教団の活動を規制しようという動きも生じているが、マインド・コントロールという概念の定義の難しさや、一世・二世信者の認識の違い、他の宗教教団への影響など、法的規制には課題も多い。こうした状況で、宗教リテラシーを身につけ、様々な宗教を比較し自分なりの視点を持つことが、カルト対策のために重要なことだと櫻井氏は述べた。

櫻井氏が参加者から事前に寄せられた質問に答えた後、中東を中心にイスラム教やジェンダーの問題について研究している後藤絵美氏（東京外国語大学助教）によるコメントが行われた。後藤氏は、カルト問題の中に「信仰」はどう位置づけられるのか、宗教リテラシーにおいて何をどこまで理解すれば「知った」ことになるのか、という2つの問いを提起した。

櫻井氏は1つ目の質問については、宗教とカルトは地続きであるため「カルト」というのは実態ではなく、その組織の社会性を評価する際の概念として使うべきだが、倫理的な側面の有無で宗教とカルトや過激主義を区別することは可能だと答えた。2つ目の質問に対しては、宗教文化を学ぶうえで重要なのは、自己の限界を意識しつつ、偏狭な視野に陥らないように交流や広がりの中で学ぶことではないかと述べた。コメントとリプライの後、会場およびオンライン上の参加者との質疑応答が行われた。

講演の終了後は、宗教文化士のみを対象とした交流および歓談の場が設けられた。

（藤井修平）